The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	藤原新也作『印度放浪』に見られる作家のインドイメージ : 堀田善衛作『インドで考えたこと』を参照しつつ
Author(s)	Anushree
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/414
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【24】

氏　　名	Anushree（アヌシュリー）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２４０６１　号
学位授与年月日	平成22年３月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	藤原新也作『印度放浪』に見られる作家のインドイメージ－堀田善衛作『インドで考えたこと』を参照しつつ－
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　高橋　　明 （副査） 教　授　嶋本　隆光　　准教授　松村　耕光　　准教授　山根　　聡 准教授　五之治昌比呂

論　文　内　容　の　要　旨

本論文の目的：

今日のグローバライゼーションの中で、ますます多くの日本人が仕事や旅行を目的としてインドを訪問している。これらの日本人の多くは、知識の多寡にかかわらず、インドに関する一定のイメージを胸に抱いて、インドを訪れていると思われる。そのイメージが現実のインドを前にして、強化される場合もあれば、修正を余儀なくされる場合もあるだろう。また、逆に事前に持っていたインドイメージが、実際のインドについての正しい理解を助けることもあれば、あるいは妨げることもあるだろう。しかし、いずれにしても、日本人が持つインドイメージに関する包括的な研究はこれまでなされていない。本論文は、その空白の一部を埋めることを目的としている。

研究資料：

その目的のために、本論では藤原新也（1944 - ）作『印度放浪』を主なテキストとして取り上げることとした。同書は、1972年に出版されると、その衝撃的な写真、そして鮮烈な文章の力が相俟って、当時の日本の若者を中心にベストセラーとなった。ある意味で、その後の日本人の持つインドイメージを固定化することにも力があったと思われる。本論文では、『印度放浪』を中心として藤原が日本人に提示したインドイメージがどのようなものであるかを解明し、併せてそのイメージの生成過程についても検証することを目指している。

また、その際、『印度放浪』に先だって出版された堀田善衛（1918 - 98）作『インドで考えたこと』（1957）を常に参照することとした。藤原は堀田の旅が終わったところから、自分の旅が始まったと総括しており、そのことから藤原の『印度放浪』の理解のためには、堀田善衛の同書の検討が避けられないと思われるからである。また、堀田自身のインド理解とインドイメージの分析のために、彼がインドである種の道標としたE.M.フォスター(E. M. Forster；1879-1970)の『インドへの道』（*A Passage to India*；1924）と堀田の作品との関係についても明らかにしたい。

論文構成：

本論文を構成する各章の概要は以下のとおりである。

「はじめに」においては本研究の背景、目的、研究資料を示した後、インドと日本の文化的、政治的、経済的交流史に関する先行文献の紹介を行った。その中で、日本人が持つインドイメージに関する包括的な研究がなされていないことについても明らかにした。さらに、堀田善衛の『インドで考えたこと』及び藤原新也の『印度放浪』に関する先行研究についての分析をおこなった。『インドで考えたこと』については、堀田が展開した思考についての批評はあるが、同書の中で示されたインドイメージについて特化した研究は少ないこと、また『印度放浪』についても藤原がいわば「インドで感じたこと」についての批評はあるが、表現されたインド、すなわちインドイメージそのものとその生成過程に踏み込んだ研究成果は見られないことを明らかにした。その上で、本研究がその空白の一部を埋める試みであることを述べた。

第1章では、藤原より先に旅立つ堀田善衛の『インドで考えたこと』の分析を行なった。堀田はアジア作家会議に日本人代表者として参加するために訪印した。インドを理解するために、堀田にはイギリスの作家フォスター作『インドへの道』を重要な道標として用いた。いわば、フォスターによって示された『インドへの道』を辿った堀田は、フォスターと自らの体験の中に共通点と相違点の両方を見出す。堀田はインドの「文明」、「文化創造のエネルギー」、「地中海の体現する規範」、「無限の思想」などについてフォスターと共感しつつも、その他のインドの一面については理解を異にした。『インドへの道』を追体験しつつ、次第に自己のアイデンティティについての理解を深めていく堀田は、インドのとある洞窟を訪れる。そこで、小説の登場人物であるイギリス人女性と同様に、不思議なこだまを体験する。しかし、『イ

ンドで考えたこと』と『インドへの道』の中に見られるこだまの描写は一見非常によく似ているが、イギリス人と堀田にとってこだまのもたらした結果は、まったく異なるものであった。自らのアイデンティティについての混乱状態に陥るイギリス人の登場人物とは異なり、堀田はアジア人としての新しいアイデンティティを確認することで蘇生感を得た。その意味で、堀田のインド旅行が、新たな自分を発見する旅となったことを明らかにした。

第2章において、藤原新也の生い立ちと彼の旅の概略及び著書、写真集について紹介した。特に、藤原のインドに関する数多くの作品の中から、本研究の基本資料として『印度放浪』を取り上げた理由を明らかにした。また、同書の複数の版の異同を精査し、1984年の文庫版を選んだ理由についても述べた。その後、本研究のために非常に重要だと思われる、藤原の採用したアプローチの手法を分析した。藤原は自らのアプローチについて、『インドで考えたこと』に見られる堀田の旅が終わった所から自分の旅を始めたこと、また堀田と正反対な手法を採用したことについて語っている。彼はインドに対して、「人間として持ち得る最も根源的なもので対抗していきたい」との意志を示すとともに、直感あるいは感覚によってインドを理解しようと努めた。次に、『印度放浪』の中に表現手段として使用されている写真と文章との関係について分析し、インドは「場」が「実相」であると考える藤原にとって、自らの旅体験を伝えるために写真が欠かせない手段であったことを示した。

第3章では、主に藤原がインドへと旅立った時期の日本の社会的状況とそれについての藤原の見解を明らかにした。ただし、当時の日本社会の全体に関する分析ではなく、藤原のインドイメージ形成と関わりを持つと思われる事項のみに限定した。当時の日本は高度経済成長の真っ盛りの時期であり、社会の中にいろいろな面で変化が現れていた。国も国民も豊かになる時期であった。しかし、高度成長を契機に藤原の父親が経営していた旅館が取り壊されることになった。藤原にとって「母胎」のようだったこの旅館の取り壊し体験が、その後の彼の思索に深い影響を与え続けたことを明らかにした。その後、日本人の社会意識に見られる変化、学歴社会、労働の供給源としての人間、大衆社会、激化する自然破壊と公害問題、管理社会などの現象を取り上げつつ、管理化の進行しつつあった当時の日本社会を、藤原がどう受け取っていたかについて考察した。最後に、藤原が訪れた時期のインドの経済や政治的状況についても簡単に紹介した。藤原をインドへの旅に駆りたてたものが、当時の日本社会の現実そのものであったことを明らかにした。

第4章では、インドにおける旅の中で、藤原が取り上げたインドイメージのいくつかについての分析を試みた。それらは、「インドの動物の風景:「奇妙な秩序」、「発展と進歩とは無縁の国インドの少年たち」、「人生賛歌の歌声とポップアート」、「藤原のヒンドゥー教観」と「モラリティーを与えるインドの自然」である。そこに示されたインドとは、人間と動物が奇妙な秩序を保ちながら、さらには人工物まで含んで渾然一体となって暮らすアニミズム的世界であり、人間を再生させ新たな人生への旅へと向かわせる力を与えてくれる村のある世界であり、貧困の中で発展や進歩と無縁の生活を送りながら健康で幸福な少年たちのいる世界であり、厳しい児童労働にもかかわらず自分だけの世界を構築する少年のいる世界であり、美しい歌声による人生賛歌とエリートの芸術家ではなく絵師のいる世界であり、人々が欲望を露わにし、自然からモラリティーを得る世界である。これらのインドイメージの特徴を分析することにより、これらはすべて、実は藤原にとっての日本社会の現実をインドという鏡に映し出した、いわば日本社会の鏡像であることを明らかにした。

第5章では、藤原にとっても、また日本人読者にとっても最も強い印象を与えたと思われる、インド人の「死」と「生」について藤原がいかに理解したかについて分析した。藤原はガンジス河の岸辺の火葬場に通い続け、写真を撮り続けた。また、河の中州に流れついた死体を犬や鴉が食う衝撃的な光景を目撃した。それらの死の光景を見る中で、藤原は不思議な蘇生体験をした。死を見ることで、生の感覚を取り戻したと彼は語っている。しかし、そのような藤原の反応と理解の背景には、日本社会における死の完全な管理化と隠蔽の歴史があることを明らかにした。ここでも、死と生が共存するとのインドイメージの形成の背後に、現代日本の社会が失ったかつての日本の姿のイメージがまず藤原の胸にあったこと、また彼はその失われた日本から光をインドに投影し、そこからの逆照射として浮かび上がってくるインド像を読者に提示したことを明らかにした。

第6章では、『印度放浪』に見られる、言語と写真という手段について分析した。藤原のインド人と交わされた会話の実例をいくつか見れば、彼の十分ではなかったと思われる英語及びヒンディー語では、ほとんどインド人とのあいだで深い理解が困難であったと思われる。また、彼はインドそのものが言葉とはある意味で無縁の世界であると認識していたことも明らかにした。そうした藤原にとって写真という表現手法がきわめて重要であったことを明かにした。次に、『印度放浪』に見られる「死」に関する写真を取り上げて、これらの写真が日本人の持つインドイメージを強化することになったことを明らかにした。

「おわりに」では、堀田も藤原も彼らのインドへの旅は、それぞれ二人がすでに抱いていたインドイメージの確認過程にすぎなかった面があることを明らかにした。中でも、インドが仏教発祥の地であることからくる、一定の共通のインドイメージを二人が抱いていた可能性について指摘した。『印度放浪』も現実のインドを伝えるよりも、日本社会の一種の鏡像としてのインドイメージを提示するものであることを明らかにした。

論文審査の結果の要旨

執筆者　：　アヌシュリー
在籍　：　大阪大学言語社会研究科言語社会専攻博士後期課程３年
論文題目：「藤原新也作『印度放浪』に見られる作家のインドイメージ――堀田善衛作『インドで考えたこと』を参照しつつ」

論文の構成：

本論文は、研究の目的と先行研究を述べる「はじめに」に続いて、まず第１章で堀田善衛のインド理解について明らかにした後、堀田善衛のインド旅行が終わったところから自らの旅が始まったと位置付ける藤原新也のインド旅行記『印度放浪』に見られるインドイメージを分析するために、第２章では藤原の人物と作品及びインドへのアプローチについて論じた。さらに第３章では藤原がインド旅行に赴いた時代の日本社会の状況と藤原の旅との関係を論じた。その後、第４章から第５章にわたって具体的なインドイメージの分析とその生成過程を論じた。第６章では藤原にとっての二つの表現手段である言葉と写真の関係について論じた。最後の「終わりに」を含めて、本文だけで２０５頁に及ぶものである。

研究の位置付けと先行研究：

インドは日本人にとって仏教伝来の国として昔より深い関心と興味の対象としてあり続けてきた。近代以降は、イギリスの支配下にある植民地として、またガンディーやネルーの指導のもと独立を勝ち取ったアジアの新興国として、さらに近年では経済発展著しい南アジアの地域大国として、その時々の姿を見せてきている。これらの歴史や日印間の関係を反映して、日本においてインドは経済的、文化的、政治的な専門研究の対象とされてきた。しかし、インドに対して日本人が持っているイメージを総体として分析の対象とした研究はこれまでなされていない。本論文は、戦後日本人によって発表された旅行記の中でも、日本人の若者に最も影響を与え、かつ若い世代を中心に日本人のインドイメージをある意味で決定づけたと思われる藤原新也作『印度放浪』を主たるテキストとして取り上げ、現代日本人の持つインドイメージの生成過程にまで踏み込んで分析を試みた労作であり、従来の研究分野の空白を埋めようとする貴重な試みであると言えよう。

また、本論文の重要な特徴の一つとして、藤原の作品のみに論点を絞るのではなく、藤原自身が自分の旅が始まった所として指摘した堀田善衛の『インドで考えたこと』との対比を常に心がけることで、理知的、思弁的なインドに対する堀田のアプローチに比べて、感覚的、肉感的な藤原の独特なインドへのアプローチの特徴をより明確に浮かび上がらせることに成功している点が挙げられる。さらに、堀田のインド理解を的確にとらえるために、堀田が一種の道標として寄りかかっていたイギリス文学の傑作、E.M.フォスターの『インドへの道』についても分析の指標として活用していることも斬

新な視点である。

とはいえ、一般にイメージ分析を行う場合の資料として、藤原の『印度放浪』がルポルタージュとしての性格よりも、より純粋な文学作品としての性格を強く持っていることからくる限界、またイメージ分析自体にある恣意性に配慮しなければ結論の客観性が担保できなくなること、さらに本論文の結論として指摘されている異文化に対するイメージ生成にイメージを抱く者自体が属する文化が強く影響を及ぼすという結論が、いわば一般的に予想されうる結論であることなどについては、より多くの旅行記を研究資料として取り上げることや藤原の旅行自体を当時の世界の思想状況の中で位置付け直すことなど、克服すべき将来の課題として指摘することが可能である。しかしながら、現代インドに関してどのようなイメージが、どのような具体的な生成過程を通じて、日本社会で生み出されたのかを、具体的な作家と作品を手がかりに事例を挙げつつ、説得力ある論理を展開した本論文は高く評価することができる。

比較文化研究としての論述：

本研究は広い意味での比較文化研究であるが、その最大の特徴は、特定の異文化に関するイメージがどのような具体的な背景と過程を通じて生成されたかを具体例を挙げつつ、緻密に論じたところにある。まず、本論文においては、藤原新也の『印度放浪』に先立つ重要なインド滞在記として、著名な文学者堀田善衛による『インドで考えたこと』を取り上げて、そこに見られるインドイメージ、あるいはインド理解を、イギリス人作家E.M.フォスターの『インドへの道』が果たしていた役割に言及しつつ、明らかにした。結局のところ、堀田は小説の中のイギリス人登場人物の体験を追体験しながら、西洋が造り上げてきたインドイメージを追認しつつ、しかし、最後には自らのアジア人としてのアイデンティティを確認するという皮肉な結果に至ることを明らかにした。それこそが堀田が西洋的な教養を基にして、知的かつ論理的なアプローチでインドに臨んだ態度の限界でもあり、成果でもあったと言える。

これに対して、本論文では藤原新也がインドについての知的な情報や知識を一切得ようとせず、自分の肉体と感覚だけを手がかりに異文化インドを理解しようとしたことに着目し、その結果としてどのようなインド像、インドイメージが生成され、日本人読者に提示されたかを明らかにした。まず、高度経済成長期の日本社会のある意味での意図的な脱落者としての藤原が置かれた特異な状況を、藤原の多くの作品を渉猟して説得力豊かに導き出すことに成功している。

次に、『印度放浪』の中で藤原が描き出したインドイメージの中で、いくつかの具体的な例を取り上げて、そのようなインドイメージ生成の背後に、常に、藤原が残してきた日本について、かつての日本、こうあるべきであった日本像が存在していることを指摘している。たとえば、藤原が初めてインドに足を踏み込んだ国境に近い町の中で、動物と人間が渾然一体とした混乱の中に、一種不思議な秩序の存在を認めて驚いた背後には、日本の生家がそこに住んでいた動物たちの精霊と共に、目の前で解体されるのを見守らざるを得なかった、少年藤原の痛切な原体験があることを明らかにしている。

また、発展や進歩とは無縁の貧しい児童労働に従事するインドの少年たちが、貧困と不幸にも関わらず、自らの汚れのない内面世界を保持しつつ懸命に生きている姿を提示しているが、その背景にも高度経済成長と管理化の度合いを強めていた日本社会の中で常に違和感と不安にさいなまれていた藤原自身の少年時代が反映されていることを指摘した。このように多くの事例を挙げて分析することで、藤原の提示したインドイメージの生成過程に常に藤原自身の抱く日本イメージが深く関わっていること、インドイメージがいわば日本のイメージを裏返しにした、日本の鏡像としてのインドの姿に他ならないことが、十分な説得力を持って論じられている。

さらに、本論文がもっとも力を込めて論じているのがインドの「死」と「生」に関して藤原が提示したインドイメージである。そのイメージを衝撃的に日本の読者に伝えたのは彼が撮影した多数のインド人の葬儀と遺体の写真である。このようにして、インドは死が日常の中で隠蔽されることなく顕在している社会であることが、写真に示された「事実」を証拠として否定しようもなく示されている。藤原は、インドにおいて目の前にある日常としての死を見つめ続けることで、自らの生の感覚と意識を取り戻すことができた、と述べる。そして、インドで顕在する死を見つめることは、実は、日本において隠蔽されてきた死のあり方をこそ暴露するものであることが同時に明らかになる。本論文では、近代の日本人が葬儀社の発展に伴い、その裏返しの現象である儀礼としての葬儀の退化を経験してきたこと、日本社会から死が結果として隠されてきたこと、それが社会全体の管理化と関係していること、その最大の不幸として日本人が生の実感から遠ざかってきたことを論じている。そのことが、藤原のインドの死を扱ったいくつかの衝撃的な写真、なかんずく犬や鴉に食われるままになっている屍体の写真が日本人読者に対してインドに関するイメージの強い喚起力を持ったことを明らかにしている。しかし、さらに本論文では、そこで明らかになっているのはインドの実態や事実ではなく、むしろインドを鏡として映っている日本社会の姿であることを示している。このようにして、藤原のインドイメージを論じることにより、実は、そのイメージが日本社会のインドという鏡に映った歪みが多く含まれた鏡像であることを明らかにすることに成功している。

研究成果の評価：

上記のように、日本人旅行記に提示されたインドイメージが、実のところ、その旅行者が帰属する日本社会の鏡像として歪みとひずみを多く含んだものであったことを明らかにすることに成功した本論文は、これまでの日本人が持つインドイメージの分析というだけではなく、日本人そのものが異文化の理解を試みる時に陥りやすい傾向を示唆することにもなった点で、優れた研究成果であることは疑いの余地がない。また、『印度放浪』だけではない数多い藤原の作品のほぼすべてを読了し、適切に参照、引用をしていること、また堀田善衛だけではなく、遠藤周作や沢木耕太郎などの関連する文学作品にも目配りをしていることなども高い評価の理由となった。また、本論文の日本語が表現力や論理の明晰さに関して、高い水準を示していることも評価の対象となった。

最後に、在籍中に本論文執筆者が行った精力的な研究・学会活動（査読付き論文２点、研究ノート１点、研究報告１点、学会発表４回）を踏まえて今回提出された本論文の成績について、論文審査担当者は「合格」との評価で一致した。